

## ルカによる福音書13章 「滅びに向かってもあきらめない主」

### 1A ガリラヤ人とローマの確執 1-9

1B 災難を通しての悔い改めの警告 1-5

2B 実を結ばない木をあきらめない主 6-9

### 2A 群衆の浅はかな喜び 10-21

1B 安息日の解放 10-17

2B 種を含む神の国 18-21

### 3A エルサレムに向かう道 22-35

1B 狭い門 22-30

2B ヘロデの殺害の意図 31-35

## 本文

ルカによる福音書 13 章です。イエス様が、エルサレムに向かう旅を始められて、多くの群衆が付いてきていました。けれども、群衆の思いはイエス様のそれは大きく離れていました。主は、天候のことを取り上げて、空の様子を見分けることができているけれども、どうして今の時代を見分けることができないのか？と問われました。つまり、神がキリストを世に遣わされ、その徴があまりにも明らかなのに、どうして受け入れないのだ？どうして、わたしのところに来ないのだ？ということイエス様は語っておられました。

### 1A ガリラヤ人とローマの確執 1-9

そこで、群衆の何人かが、やはり、まだ分かっていない、悟っていない様子をうかがわせる質問をしています。

### 1B 災難を通しての悔い改めの警告 1-5

1 ちょうどそのとき、人々が何人かやって来て、ピラトがガリラヤ人たちの血を、ガリラヤ人たちが献げるいけにえに混ぜた、とイエスに報告した。2 イエスは彼らに言われた。「そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったと思いますか。3 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。

この人たちは、少し脅しをかけるような形で報告しています。イエス様はガリラヤ出身ですから、ローマ総督がガリラヤ人に対してこのような仕打ちをしたのであれば、イエス様もユダヤとエルサレムに入れば、主こそキリストであるならば、ローマに反逆しているとみなされ、このような目に遭うという暗の脅しをかけているのかもしれない。

当時のユダヤ属州のローマ総督は、ポンテオ・ピラトでした。こんな歴史が記録されています。カイサリアが、ユダヤ属州の首都です。そこに必要な水を確保するための導水橋を建てました。その財源を得るために、ピラトがエルサレムの神殿の金庫から取って使ったというのです。それで怒ったユダヤ人が騒動をカイサリアで起こしました。ピラトは、ローマ兵たちに一般市民の服装を着せて、紛れ込ませて、そして一気に彼らを殺したと、ヨセフスが言っています。けれども、その血をエルサレムで、ガリラヤから来たユダヤ人たちの捧げるいけにえに混ぜるところまでは史実に載っていません。

ここでイエス様は、ユダヤ人のしたことが悪いのだと言われたら、ユダヤ人の人気を失います。ユダヤ人たちはイエスに反対することでしょう。そしてユダヤ人の側につけば、ローマに反逆する首謀者と見られかねません。政治問題というのは、このように私たちにどちらに付くか、という党派心を引き起こします。そうした争点ではなく、イエス様は根本的な霊的問題を取り上げられました。それは、「他人事のようにして、ガリラヤのユダヤ人の中で起こった事件を語っているが、あなたがたは悔い改めなければ、同じように滅びるのです。」ということです。12章の話の続きです。おのおのが、イエスの残されている徴に回答しなければいけないのです。それをせずに、他人の身に起こっていることを自分のこととして捉えていない、霊的怠慢について叱責しておられます。

また、そのように報告をしている本人たちが、まるで人々に起こった災いを喜んでおられるかのように見えます。私たちが悲劇的な事を見る時に、それを悲しむことすれ、喜んではいけません。「箴17:5 人の災害を喜ぶ者は罰を免れない。」とあります。

4 また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいるだれよりも多く、罪の負債があったと思いますか。5 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

自然災害においても、同じことが言えます。そのような不幸なことが起こったら、その人が何か悪いことをしたからだという議論にすぐに発展します。しかし、そうではなく、「あなた自身が悔い改めなければ、同じように滅びるのですよ。」という警告、注意喚起を神は教えておられるのです。

東日本大震災の時に、「なぜ神はこのような悲劇をお許しになられたのか。」という声がたくさん上がりました。私もメールで、そんな質問を受けました。私は苛立たしくなりました。神の御心は、キリスト者とその苦しみの中に行き、キリストが被災者の方々と共におられることを示すことではないか！と思っていただけです。そして、神が何かを語っておられるのであれば、「こんなものではない！」という注意喚起であります。東日本大震災で、海岸の地形が変化したとされています。けれども、黙示録に書かれているのは、「6:14 天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべ

ての山と島は、かつてあった場所から移された。」というものです！私たちが問わなければいけないのは、「なぜ神がそのように人を死なせたのか？」ではなく、「なぜ私たちがこのように生かされているのか？」であります。その死んだ人たちのことは、神の領域です。しかし、今、生かされている私たちは、この神に対してしっかりと悔い改められているでしょうか？

## 2B 実を結ばない木をあきらめない主 6-9

このように、一見、まともな質問をしているように見えて、実は心の頑なさを表しているのですが、それで今、神がどのような思いでおられるのか？ご自身はどうお感じになっているのかを譬えでお語りになります。

6 イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。そして、実を探しに来たが、見つからなかった。7 そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』8 番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。9 それで来年、実を結べばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』」

ぶどう園にあるいちじくの木は、イスラエルの民を示しています。ところで、ぶどう園に、ぶどうではなくいちじくを育てるのは、よくあります。旧約聖書の中に、イスラエルがぶどうの木であるとか、いちじくの木であるか、喩えられています。そして、良い行いが実を結ぶことです。イスラエルが神に選ばれたのは、良い行いによって神の栄光を表すことです。

三年経っていますが、実を結ばせていないと主人がいいいます。これはイエス様が、約三年間、すでに宣教活動をされていることを示しているのでしょうか。主がバプテスマをヨルダン川で受けられ、それからガリラヤで宣教を始められて三年が経つのに、悔い改め主を信じ、それにともなう実が結ばれていなければおかしいのです。ところが、実を見ることができません。それで切り倒すと主人はいいいます。イエス様は、ぶどうの木とその枝の例えも語られましたが、実を結ばない枝は焼かれます。実を結ぶからこそ枝の役割を果たすのであり、そうでなければ役に立たないのです。

そして、イエス様はご自身を番人に喩えられます。イエス様が父なる神に執り成しをされます。もう一年そのままにしていただけませんか、肥しを入れて実が結ばれるために猶予をくれませんか、とお願いしています。これが、エルサレムに向かうイエス様の心でした。もうすでに遅すぎるのですが、それでも引き延ばして、彼らが実を結べるようお願いしています。これが、イエス様の心です。私であれば、とうの昔にあきらめていたことでしょう。イエス様ご自身も、父の思いを共有しているのです。しかしそれでも、主はあきらめずに手を差し伸べられています。

## 2A 群衆の浅はかな喜び 10-21

場面は、安息日における会堂に移ります。

### 1B 安息日の解放 10-17

10 イエスは安息日に、ある会堂で教えておられた。11 すると、そこに十八年も病の霊につかれ、腰が曲がって、全く伸ばすことができない女の人がいた。12 イエスは彼女を見ると、呼び寄せて、「女の方、あなたは病から解放されました」と言われた。13 そして手を置かれると、彼女はただちに腰が伸びて、神をあがめた。

しばしば起こった、安息日でイエス様が会堂でラビとして教えておられた時に行われた奇蹟です。病の霊によって腰が曲がっていた、とあります。16 節で、「十八年もの間サタンが縛っていたのです。」とイエス様は言われます。したがって、これは単に病による苦しみ以上の、霊的な抑圧であることが分かります。神がエバを惑わした蛇に対して、地を這うようになると呪われましたが、サタンは自分と同じ運命の中に、この女を入れてあります。天を見上げることのできないようにし、呪われた地をいつも目にしていなければいけない、地の塵を嘔むような生活であります。そして主が手を置かれたら、その腰が伸びました。そして神をあがめています。

14 すると、会堂司はイエスが安息日に癒やしを行ったことに憤って、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。だから、その間に来て治してもらいなさい。安息日にはいけない。」15 しかし、主は彼に答えられた。「偽善者たち。あなたがたはそれぞれ、安息日に、自分の牛やろばを飼葉桶からほどもき、連れて行って水を飲ませるではありませんか。16 この人はアブラハムの娘です。それを十八年もの間サタンが縛っていたのです。安息日に、この束縛を解いてやるべきではありませんか。」

主がなされたすばらしい解放の業に対して、安息日を守っていないとして、会堂司が、霊的な管理をしようとしています。けれども、イエス様は一気に反論します。そもそも、安息日というのはイスラエル人が、奴隷から解放されて自由人として安息ができるという印でありました。縛られているところ、囚われているところから解放するというのが、安息日の意味の一つだったのです。そして、家畜をほどもき水を飲ませることは、どの家庭でも行われており、安息日ももちろん例外ではありません。それは、労働として数えないという解釈を彼らは行なっていました。家畜でさえ解いてあげるのであれば、ましてやアブラハムの娘であるこの女をサタンの束縛から解いてあげるべきではないか？ということなのです。安息日に、束縛を解くことはもっともふさわしいことです。

17 イエスがこう話されると、反対していた者たちはみな恥じ入り、群衆はみな、イエスがなされたすべての輝かしいみわざを喜んだ。

群衆は喜んでいますが、イエス様の御業を見て喜んでいますが、どうも少し雰囲気の違いがあります。神をあげているのではなく、ただ喜んでいますが、反対していた会堂司がたじろいでいるのを見て、半ばエンターテイメントのようにして喜んでる可能性があります。

## 2B 種を含む神の国 18-21

そうした背景があって、イエス様は群衆の反応を見られた後に、二つの喩えを語られるのです。

18 そこで、イエスはこう言われた。「神の国は何に似ているでしょうか。何にたとえたらよいでしょうか。19 それはからし種に似ています。ある人がそれを取って自分の庭に蒔くと、生長して木になり、空の鳥が枝に巣を作りました。」20 再びイエスは言われた。「神の国を何にたとえたらよいでしょうか。21 それはパン種に似ています。女の人がそれを取って三サトンの粉に混ぜると、全体がふくらみました。」

この神の国についての喩えは、解釈が正反対に二つに分かれます。一つは、福音が広がって、全世界が総福音化されるというものです。パン種の喩えも全体に福音の種が広がるという見方をします。「神の国」とありますし、私もそのように思っています。確かに、福音が全世界に伝えられるという預言をイエス様は行われました。確かに霊的復興によって、福音が世界中に勢いよく広まっています。

けれども、私は、もう一つの解釈のほうに傾いています。それは、「神の国だ、と呼ばれているものに中に、悪い種が入って、世界を支配するほどまでになる。」という見方です。「空の鳥が枝に巣を作りました」という表現は、ネブカドネツアルの見た夢に出てくるもので、バビロンの国が大きくなって、その繁栄の中に生きている者が憩う、という意味があります。そして同じように、空の鳥について、イエス様は天の御国の喩えの中で、それが悪魔を表していることをマタイ伝で見ることができます。それから、パン種の喩えは、パリサイ人の偽善であるとかつて弟子たちにイエス様が教えられました。コリント人への手紙にも、罪と不正を表していることが書かれています。

そして何よりも、ここでは前後関係が大事です。手前の17節を見ると、群衆がイエス様の言葉を聞いて、その大いなる御業を喜んでいました。イエス様のなされることは、確かに人気を博しているのです。ところが、次、23節を見ると、「主よ、救われる人は少ないのですか。」と尋ねている人がいるのです。もし前者の解釈であれば、イエス様のなされている宣教の働きを見て、救われる人々が大勢起こされると感じなければおかしいです。ところが、その正反対のことを言っている。つまり、「多くの人がイエスに付いていっているが、それは表面的であり、本当に神の国の中に入る人は少ないのではないだろうか。」と疑問に思っているわけです。

ということは、後者の解釈なのです。神の国は、一見、増え広がって世界を傘下に置くような影

響力を持つことになる。しかし、それは悪いものが入っているために、それが増え広がっているにしか過ぎない、ということです。事実、キリスト教の歴史において、躓きになるのはこの部分です。キリスト教会がローマによって公認され、それから国教とまでなりました。それ以後のキリスト教は、日本の人は特に「何か戦争をするようなもの」のようなイメージが付きまといまいます。国とキリスト教が融合してしまったのです。私たちは前回と前々回から、群衆の中におけるイエス様の人気には、むしろイエス様を拒んでいるような要素があることを見てきました。ですから、イエス様は群衆に対して、彼らがついてきているのですが、厳しい言葉をかけつづけています。群衆にある、その間違いを厳しく正しておられます。

ですから、私たちは非常に注意して、「人気」というものを見ていなければいけません。他の人が言っているから、他の人がしているからという理由だけで、その流れに付いていくことがいかに間違っているかということです。「2テモ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め、真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代になるからです。」しっかりと自分で考える、そして流れに身を任せるという自分を捨てて、しっかりと主に自分を従わせるということが必要です。

### **3A エルサレムに向かう道 22-35**

そして 22 節以降に、改めてイエス様がエルサレムへの旅を続けていることが強調されています。

#### **1B 狭い門 22-30**

22 イエスは町や村を通りながら教え、エルサレムへの旅を続けておられた。23 すると、ある人が言った。「主よ、救われる人は少ないのですか。」イエスは人々に言われた。24 「狭い門から入るように努めなさい。あなたがたに言いますが、多くの人が、入ろうとしても入れなくなるからです。25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってから、あなたがたが外に立って戸をたたき始め、『ご主人様、開けてください』と言っても、主人は、『おまえたちがどこの者か、私は知らない』と答えるでしょう。26 すると、あなたがたはこう言い始めるでしょう。『私たちは、あなたの面前で食べたり飲んだりいたしました。また、あなたは私たちの大通りでお教えてくださいました。』27 しかし、主人はあなたがたに言います。『おまえたちがどこの者か、私は知らない。不義を行う者たち、みな私から離れて行け。』

ここの箇所は、午前礼拝で取り扱いました。「努めなさい」という言葉が、キーワードになっていることを話しました。これは、群衆に対して絶えず語られている言葉、「自分で判断する(12:57)」という言葉につながっています。彼らが、まだ猶予がある時に、つまり主が再び戻ってこられない時に、主のところに努めて入ってこようとしませんでした。ノアの箱舟のように、すでに戸が閉じられている時に救いを求めます。しかし、その時には遅すぎるのです。

彼らの言い訳が、この問題を大きく物語っています。『私たちは、あなたの前で食べたり飲んだりいたしました。また、あなたは私たちの大通りでお教えてくださいました。』彼らは、イエス様のおられるところで食べたり飲んだりし、また大通りでイエス様が教えておられるところに自分たちもいました。主はすぐそばにおられたのです。けれども、彼らはあくまでも、群衆の域を超えなかったのです。群衆の中から進み出て、自ら判断して、神を求めることをしませんでした。努めて狭き門に入ることを拒んだのです。イエスについては知っていましたが、イエスを知ることはなかったと言えます。神について知っていても、神を知らなかったということは、いくらでもあります。周りの人たちの流れに乗ってそれで信仰を持っているように見せて、実は、自分自身の信仰にはなっていないということなのです。

このようなものであれば、心にある不義に対して何ら力を持っていません。生活は変わっていません。神を知らず、主を恐れていなかったのです。不義の中にあつたのです。それで、主は「私は知らない」と言われています。

28 あなたがたは、アブラハムやイサクやヤコブ、またすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分たちは外に放り出されているのを知って、そこで泣いて歯ざしりするのです。29 人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。30 いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」

キリストが戻って来れば、復活した聖徒たち、イスラエル人にとっては自分たちの父祖、アブラハム、イサク、ヤコブが神の国の食卓に着きます。そこに、その子孫たちが共にその祝福にあずかります。ところが、それはあくまでも「信仰」という、自発的な、個々の近づきがあって成り立つのであり、単に血縁の子孫である、また近くにいた、ということでは保証されません。

神は、ご自分の招きに応答しないのであれば、他の人々をも招いて、その食卓に着かせることをなさいます。ここに東西南北から人々が来ている話がありますが、これは異邦人のことでしょう。物理的にも霊的にも、「近くにいる、遠くにいる人々も連れてくることできる。」ということでもあります。分かり易く話すならば、いつも聖書のメッセージに触れているけれども、神の国から締め出されることはあり得るし、反対に、たった一つの福音の言葉を聞いてそれに応答しているのであれば、神はことさらにその人を尊んで、祝福してくださる、ということです。神にとって、この応答という行為がどうしようもなく大切なのです。

そこで、「後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」という現実があります。教会の中でも起こりますが、教会に来て間もない人が霊的に成長していくのに、教会に来て何年も経っている人が、いつまでも赤ちゃんのままで留まっている、ということがあります。私たちはキリスト教を自己修練のように考えたいです。年数を積めば、それだけ霊的に受け入れられていると思

たいのです。いいえ、神はキリストにあつてすべて人を平等にされます。今、救われたばかりの人も、三十年間、信仰生活を送った者も、全く同じように、子供のように神の愛と恵みを受けるようにされているのです。

## 2B ヘロデの殺害の意図 31-35

31 ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここから立ち去りなさい。ヘロデがあなたを殺そうとしています。」32 イエスは彼らに言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。33 しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』

イエス様はエルサレムの旅をしていますが、まだガリラヤ地方あるいはペレヤ地方にいました。そこはガリラヤの領主ヘロデ・アンティパスの管轄下にあります。それで、パリサイ人たちはあなたを殺そうとしていると言っています。イエス様に人気が出てきて、それによって騒動が起こるのではないかと恐れて、イエス様を捕え、できれば取り除こうと考えていたようです。ヘロデは基本的にティベリアにいました。けれども、イエス様は同じガリラヤ湖周辺でもティベリアのほうには行かれませんでした。政治的に、ヘロデによって始末される危険があったからです。彼は、あのバプテスマのヨハネを殺した男です。パリサイ人は、親切心と言うよりも、ガリラヤ地方から出ていってほしいと思って、この状況を伝えに来たのかもしれませんが。

けれどもイエス様は、「あの狐」と言われます。これはユダヤ人にとって、かなりきついことばです。しかも女性形になっており、「女狐」と言われています。私たちが想像するような「狡猾な者」という意味合いもありますが、あとは「小心者、何でもない者」という意味合いもあります。イエス様は、ご自分の身边に気をつけていましたが、それはご自分の使命を犠牲にしてのものではありません。しなければいけないことはしていけます。続けて、悪霊を追い出し、病人を直し、十分に行われてから、エルサレムに行かれます。そして、死ぬのはエルサレムにおいてである、ということをご存知でした。ですから、神のこの働きはヘロデによって妨げられることはありません。

イエス様のこのバランスが好きです。気をつけるのですが、恐れません。

34 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。

エルサレムこそが、神の御名が置かれている町であり、永遠の都と定められたところでした。ところが、そこが預言者を殺すところとなってしまった。ここで歴代のユダの王たちが、悪を行ない、預



言者を迫害しました。同じように、イエスご自身も迫害されます。

そしてイエス様の心があります。先ほどは、一年間、猶予をくださいと言って肥しをいれる番人の姿を見ましたが、ここでは、「めんどりがひなを翼の下に集めるように」と言われています。翼で覆うという表現はイスラエルの民に対して神が使われた言葉です。イエス様は厳しい言葉をかけられましたが、その表面的な厳しさとは裏腹に、めんどりが雛を自分の翼のところに集めようとする優しさでありました。神の国に入れれないというのは、唯一、そこに入ることを拒むことだけです。

35 見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

紀元後 70 年に、神殿が破壊されます。そして、「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」という言葉は、詩篇 118 篇 26 節にある、主を都にお迎えする時の言葉です。あの「ホサナ」と叫ぶ言葉の次に書かれています。それを主が入城される時に群衆が叫んだのですが、その次に言うことができた言葉を、みすみす見逃したのです。そして、次の機会は「わたしを見る」とありますが、イエス様が再び来られる時であります。その時に、彼らがようやくイエスが来るべきメシアであることを認めるのです。

私たちは、このような難しい時代に生きていることを知る必要があります。つまり、怠慢になってしまっている時代です。他人事のように悪くなっていく時代を見ている時代です。自ら入ろうとする人がおらず、遅すぎるかもしれないという時代です。イエス様と同じ哀しみの声を挙げるかもしれない時代です。けれども、最後まで救いの機会がある時に人々にイエス様を伝えています。